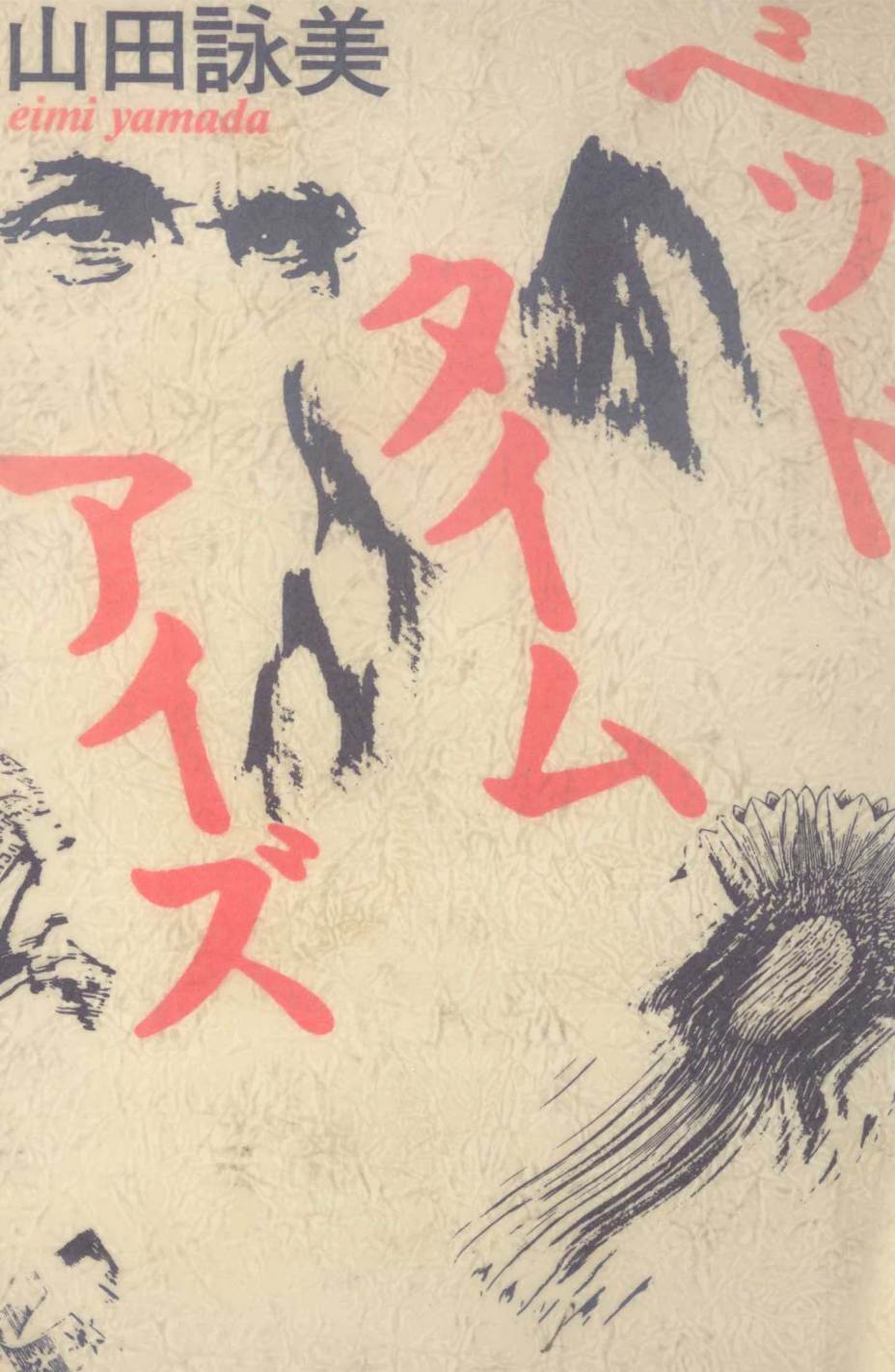
山田詠美
eimi yamada

ベッドタイムアイズ



つながるメンタルケアズ

山田詠美

eimi yamada

河出書房新社

山田詠美（やまだえいみ）
昭和三十四年、東京生れ。
明治大学文学部中退。
「ベッドタイムアイズ」で
昭和六〇年度文藝賞受賞。

ベッドタイムアイズ

昭和六十年十一月三十日　初版発行
昭和六十一年一月八日　七版発行

著者　山田詠美
装幀者　菊地信義
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社
©1985　Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
ISBN 4―309―00421―0

目次

ベッドタイムアイズ　3

昭和六〇年度文藝賞選後評より　江藤淳　河野多恵子　野間宏　小島信夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

ベッドタイムアイズ

I

スプーンは私をかわいがるのがとてもうまい。ただし、それは私の体を、であって、心では決して、ない。私もスプーンに抱かれる事は出来るのに抱いてあげる事が出来ない。何度も試みたにもかかわらず。他の人は、どのようにして、この隙間を埋めているのか私は知りたかった。マリア姉さんに聞いても具体的には教えてくれない。いっそこうしろと誰かに命令された方がよかった。意志を持たない操り人形が示された処方箋を読むように私はスプーンの痛むと

こを舐めまわしたい。それが彼のディックを舐めまわすより、はるかに困難だという事に気づくまでに時間がかかり過ぎた。何故、もっと早くから練習しておかなかったのか、と思う。

洗面所にはスプーンの使っていたブルートという香水の空き瓶やヴァイタミンEのカプセル（これがなくてはファックが出来ないと彼は思っていた）が、今だに転っている。そして私はそれらをトラッシュ缶に捨てる事はおろかトランクにほおり込んでクロゼットの奥に仕舞い込む事すら出来ない。

スプーンが横須賀の基地を逃げ出して来た時、自分の身の回りの物全てをトランクにきれいに詰めて両手にさげ、私の部屋のドアベルを礼儀正しく鳴らしたものだから、私は長期滞在のゲストを迎えたような気持になった。トランクの中にはハーシーのチョコレート

が二十枚も並んで入っていて、彼がうちに泊まるだけでこんなに大量のチョコレートをもらってよいのかどうか不思議な気持になった。

基地のクラブでスプーンを初めて見た時、彼は何故かブラックタイにタキシードで正装していて、ネイビーの作業衣やジーンズ姿で玉突きをしている男たちの中では滑稽なくらいに粋（クール）だった。私は、自分の男が一ドル紙幣をキューと指の間にはさんでビリヤードに熱中している間、始終スプーンを盗み見した。彼の持っているセブン・アンド・セブン（バーボンとセブンナップ）のグラスも、今では尿検査のコップにしか見えないが、その時は黒い指の間にはちみつがしたたり落ちるかのように金色だった。

グラスを持たない方の手をパンツのポケットに突っ込み、彼は何かに触れているふうだ。もぞもぞと動くポケットの中の彼の指はき

っと骨張って大きいに違いない。その指はポケットの内側を丹念に愛撫しているように思われる。自分のスリットをああいった平然とした表情と卑猥な指先で探られたらどういう気持だろうかと思いついて、私は顔を赤くした。

スプーンと視線が合った瞬間、私は自分の思っていた事を彼に悟られたような気がして下を向いた。再び顔を上げた時、彼は私の視線を捕え出口の方へそれを移動させた。私はそのまま何かにとり憑かれたように立ち上がり、連れの男にレストルームで用を足して来ると言い残し、ゲームルームの外に出た。扉を開けると廊下の壁に寄りかかり今度は両手をポケットに突っ込み、まるでチンピラのように私を待っていた。

スプーンは私の腕をつかみ建物の一番隅のドアの前まで連れて行

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

く。ドアには立入禁止（キープアウト）の札が下げられ中はむき出しのパイプが複雑に絡み合ったボイラー室になっていて古い埃の匂いが漂っている。

扉を閉める音と同時に私はスプーンと、その空間の中に取り残された。

私は何か会話が欲しいと思い口を開きかけ、スプーンはそれを私の催促と勘違いしたのか、或いは、会話なんて不必要と思ったのか、私の開きかけの唇をこじ開け舌を差し込んで来た。彼の舌は、まるっきり口と独立していて私の気を失わせようとする。

私は必死に彼の上着にしがみつき、シャツのボタンを外そうとする。

――早くこの男の体の匂いを知りたい。

けれど彼の手や舌は休息を知らなかったので私の手は震えてボタ

ンをうまくつかめない。

もどかしさに舌打ちをして私はシャツの合わせ目を引き千切った。黒い胸は毛におおわれていて金色のチェーンがかかっている。

私は唇に力を込めてその胸毛を引っ張りながら男の体臭を味わう。そして、これと同じ匂いを昔嗅いだ事がある、と思う。ココアバターのような甘く腐った香り。腋の下からも不思議な匂いがする。腐臭に近い、けれども決して不快ではなく、いや不快でないのではなく、汚ない物に私が犯される事によって私自身が澄んだ物だと気づかされるような、そんな匂い。彼の匂いは私に優越感を抱かせる。発情期の雄が雌を呼び寄せるムスクはたぶんこんなふうに懐しさを感じさせるのだ。

私の乱暴なやり方に比べて男の方はかなり丁寧に適確に私の身に

着けている物を剝がしていく。

横たわるスペースもないその空間で、私は立ったまま片足を高く上げハイヒールを壁に付ける。足首には小さなショーツがハンカチーフのように巻きついている。スプーンの黒い腕が私の足に絡み、アンクレットのきらきらとした光だけが目に映る。

彼のディックは赤味のある白人のいやらしいコックとは似ても似つかず、日本人の頼りないプッシィの中に入らなければ自己主張ひとつ出来ない幼く可哀そうなものとも違っていた。海面をユラユラする海草のような日本人の陰毛は、いつも私の体にからまりそうな気がし恐怖感すら覚えてしまう。

スプーンのヘアは肌の色と保護色になっているからか、ディック自身が存在感を持って私の目に映る。私は好物のスウィートなチョ

コレートバーと錯覚し、口の中が濡れて来るのを抑える事が出来ない。流れ出る唾液は、すでに沸騰している。

私とスプーンは溜息だけで会話している。あまりの気分の良さに叫ぶ事も出来ない。快感すら訴えられない苦しさと素晴しさに、私は彼の上着をつかもうとする。偶然ポケットに触れた時、スプーンがビリヤード台の前で、しきりに愛撫していた例の物にぶつかる。それが金属であること、また日常、最も親しんでいる物であるのに気づいた時、私は体の芯にあれが来て、すべての感覚が麻痺してしまった。

足を高々と上げた、そのままの姿勢で私は彼を見詰める。湿った私の額に張りついた髪の毛を指でつまみ彼は私に、これから君の顔を思い出すたびにオレはマスターベイトするだろう、と言った。

私を思い出して自分を慰めるスプーンを想像して私はせつない気持になった。

「名前を教えて」

「スプーン」

私は彼のポケットの中の硬く冷たい物を思い出した。そして、英語の言いまわしの中に、幸福に恵まれた子供を「銀の匙をくわえて生まれて来た」という言い方があることも。

銀の匙をポケットに入れて持ち歩くという滑稽な事をしている彼を人々がスプーンというニックネームで呼ぶのは、親しみに加えて、嘲りの気持をこめて、に違いない。銀の匙（シルバースプーン）をくわえて生まれて来た者がそれを持ち歩く訳がないからだ。こんな素晴しい体を持った男が大袈裟過ぎるドレストアップをしてスプーンを握りしめながら自

分の存在を確認しなくてはいけない、そうせずにはいられない人間を造った神様の不公平に私は少し苛立った。

「あなたは時々、悲しい思いをして来た？」

「オレは、いつだって幸福だよ」

スプーンが嘘をついていると勝手に解釈をし、私は言った。

「うちに来て」

その時、私は殉教者にでもなるつもりだったのだろうか。彼を幸福な気分にしてあげるというような大それた考えを持っていたのだろうか。けれども、その後悔を彼がこう言って消してくれた。

「足を降ろせよ。疲れねえのかい。上げっぱなしでよう。もっとフアックが欲しいんなら二度目はシーツにくるまってやりてえな」

彼は、そう言って私にウィンクを送る。眉を互い違いにしかめ、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo